

**森吉山県立自然公園は  
国立公園の新規指定を経て森吉山国立公園を目指そう！  
私たちは「なぜ 十和田八幡平国立公園編入に反対なのか」**

＜はじめに＞

- 2021年12月開催の国連生物多様性条約第15回締約国会議(COP15)は、各国が2030年までに取り組む新たな生態系保全目標を採択した。23項目の個別目標からなり、世界全体の陸地と海の少なくとも30%を保護地域又は保護地域以外の生物多様性保全に資するエリア管理(OECM)により保全していくこと(30by30)が柱となっている。
- 環境省は目標達成のため、2010年から実施している国立・国定公園総点検事業のフォローアップを行い、2022年6月に国立・国定公園等の拡張を主眼とする候補地リストを発表。候補地は継続の8地域に6地域を加え14地域(個別には23地域)とした。
- 環境省の候補地パターンは大きく三つに分かれている。
  - ・タイプ1は候補地のほとんどが既存の国立・国定公園の拡張グループ(10候補地)。
  - ・タイプ2は同じく既存の国立・都道府県立公園の拡張と新規格上げグループ(3候補地)。
  - ・タイプ3が「八幡平周辺の大規模拡張地域」に選定された4つの県立自然公園で、十和田八幡平国立公園に編入か、または国定公園の新規指定を選択するタイプ(1候補地)である。
- 森吉山はタイプ3の八幡平周辺の大規模拡張地域(森吉山、真昼山地・和賀山塊、田沢湖抱返り溪谷、太平山)の一つとして、国立・国定公園に値する資質が評価され選定された。
- 環境省は八幡平地域本体と周辺4つの県立自然公園を、十和田八幡平国立公園としてどこまで拡張(編入)できるのか、または国定公園の新規指定が望ましいのか、社会環境の観点から検討(国立・国定公園の全国的な配置・地域の意向と熱意・管理体制)を行っている。
- 特に名称変更が伴う公園区分の選択は「地域の意向を尊重して決定したい」との方針を示すと共に、2024年度中には、その方向性を示したいとしている。
- 森吉山の十和田八幡平国立公園編入とは、平成の町村大合併に伴う森吉町の消滅に続き、自然公園の名称からも「森吉の名称」が消え去ることを意味する。
  - ・それは同時に、森吉山本体・奥森吉・奥阿仁に広がる数多の景勝地(花の百名山と日本三大樹氷、四季美湖、太平湖と小又峡、クマゲラの森と桃洞溪谷、天国の散歩道と称される赤水溪谷、マタギの里とその名瀑群)が、総合観光案内板や観光冊子等によって、全て十和田八幡平国立公園の景勝地に置き換わることも意味する。森吉山の公園名称とブランドを守るとすれば、当然「森吉山国定公園の新規指定」を選択する外にない。
- 森吉山の国立公園化を目指すのであれば「単独の森吉山国立公園の新規指定である」。その規模は、森吉山全集水域の大又川・小又川を内包し、1000万年前以降の古いカルデラ外輪山であろう17座が囲む約5万ha(500km<sup>2</sup>)に及ぶ、旧阿仁町と阿仁前田地区全域である。
- 環境省は「森吉山は国立公園に拡張するポテンシャルを持っている」、「人の営みが自然植生域と風景を作り上げた、自然公園と同等の資質を持つ里地里山も選定の対象とする」とした。2030年以降の見直しは、森吉山国立公園の具現化に向けて地域の熱意を示したい。
- 私たちは「なぜ 十和田八幡平国立公園に編入ではなく、森吉山国定公園の新規指定を選択するのか」。編入条件、地理的課題、公園利用の一体性、国の自然環境整備交付金や誘客促進事業、観光動向の検証から、**将来の単独国立公園の指定も視野にその考えを述べたい。**

### (1) 十和田八幡平国立公園編入に条件はあるのか？

- 国立公園編入にも条件がある。それは3県の編入を受け入れる十和田八幡平国立公園立地市町村(5市1町)も編入側の市町村(3市3町)も共に、関係者(観光事業者、市民団体等)の合意を事前に得ることが第一条件でなければならない(環境省 2023 年)。
- ・ 法的根拠はないが、環境審議会に諮問する前提条件は、国立公園誕生の歴史的経緯や文化・経済圏の長い繋がりなどから地域関係者の合意形成が必要となる。
- ・ 秋田県が議会の要請で行った関係市町村の受入れ意向調査によれば、×・△・○と定まっていなかったのが現状である(2022 年)。

### (2) 森吉山他3公園が十和田八幡平国立公園に編入された場合の名称は？

- もし「十和田八幡平・森吉山国立公園」となれば、北秋田市にとっては編入合意できる条件ではあるが、和賀山塊や真昼山地、田沢湖抱返り、太平山の立地市町村の地域感情から、これは一番難しい問題である。
- 環境省は新規指定に伴う公園名称は別として「今般の八幡平地区の拡張に伴う編入条件に、十和田八幡平という定着したブランド名称を変更する考えはない」、「また十和田八甲田地域と八幡平地域の分割の考もない」と明言している。
- 青森県は十和田市があり、岩手県は平成の大合併で八幡平市が誕生した。公園名の名称自治体が存在する限り、十和田八幡平の名称変更は無理である。
- また逆に4公園の森吉山、真昼山地、田沢湖抱返り溪谷、太平山が「十和田八幡平国立公園」に埋没することも、十和田や八幡平を公園名称とする限り地理的違和感は拭えない。
- 特に真昼山地や和賀山塊、田沢湖抱返り、太平山が十和田八幡平国立公園であるはずもない。地元市町村の合意は元より県民世論の納得は困難であろう。編入に伴う賛否に加え公園名の合意は最大のテーマである。
- 佐竹秋田県知事も「国立・国定の区分もあるが、まずはこの機会を逃さないように県としても(調査に)力を入れていく」との考えを示すにとどめている。(2022.12 月 県議会予算特別委員会総括審査)
- 津谷北秋田市長は山岳団体の要望書提出(2023.2 月)の懇談において、「山岳関係者の皆さんが国立昇格ありきでなければ、一気に国立編入ではなく、北秋田市単独の森吉山は国定公園の階段を踏んでからでもよいのではないかと述べた。
- また、真昼山地(5,903ha)と田沢湖抱返り溪谷(7,477ha)は、単独では国定公園の面積要件(10,000ha 以上)に満たないため、選択肢として国立公園に編入するか、または統合して和賀真昼田沢湖国定公園(仮称)の新規指定も可能である。対象地域の和賀山塊や真昼山地は県境を跨いで岩手県側に及ぶが、ほぼ国有林であるため、早期の環境調査終了が待たれる。但し、太平山(11,897ha)については、地理的一体性から国立公園編入は論外であろう。
- 4公園の国立公園編入論の以前から、乳頭温泉郷組合では長年に渡り十和田八甲田と八幡平地域の分割協議を継続している。編入や公園名称の選択は、十和田八幡平国立公園の発展的分割条件を担保に、別ステージの議論が必要である。何故なら、離婚協議中の相手に愛娘を嫁がせる親はいないからである。

### (3) 地理的一体性の違和感

- 森吉山は約 1000 万年前以降に北海道と東北地方で繰り返された 110 カ所に及ぶカルデラ噴火の一角を形成していたであろう、その中心部の山頂部に東西約 3 km のカルデラと東にヒ

バクラ岳～小池ヶ原の馬蹄形火口を重ねて鎮座する複式火山である。

- その森吉山は火山体として他県にまたがらない、秋田県のほぼ中央部に位置する県内唯一の独立峰であるが故に、江戸時代から大正期にかけて活躍した北前船の視標山として秋田山と呼ばれてきた。
- 環境省は森吉山の選定理由の一つに、八幡平と同様の火山地形であることを挙げているが、十和田八幡平国立公園の十和田八甲田地域と八幡平地域は、鹿角市を挟んで南北約 50 km に二分され、それぞれの山体のピーク間は 80～100 km に及ぶ。(因みに鳥海山は約 100 km)
- 東麓の奥森吉・奥阿仁地区は、火山活動に由来する標高 650～800m の火砕流大地(溶結凝灰岩)で、赤水峠から柴倉岳まで約 4 km が八幡平地域と隣接しているが、古いカルデラ外輪山が分水嶺を分けるため連山の形成はなしていない。
- したがって、森吉山は十和田八甲田地域との距離感や地理的連続性からして、同様の火山地形を理由に同国立公園の一角に編入される山塊ではない。
- 河川と山塊の分水嶺によって生活圈・文化圏・経済圏を異にする日本的風土感からすれば、北秋田市から日々の眺望が叶わない十和田八幡平国立公園との距離感には大きな違和感を覚え、その溝は埋めがたい。

#### (4) 八幡平地域と利用の一体性はあるのか？

- 十和田八甲田地域は遠距離のため利用の一体性は皆無である。隣接する八幡平地域の玉川温泉は、戦前までは湯治目的で阿仁部近傍からの往来があった。その「湯治場古道」の証しとして、奥阿仁と奥森吉から赤水峠を経由し玉川温泉に至るブナの幹には、多くのナタ目が散見され、古いものは大正年代のものが確認できる。
- 1994 年に森吉山の公園計画の大幅な見直しが行われた。公園指定当初、奥森吉と玉川地区をつなぐ湯治場古道の公園計画は「車道」であったが、国天然記念物のクマゲラ発見や自然環境の保全優先の観点から「回廊型歩道」に変更した。この公園計画は実施に至らず、国有林野の伐採事業も影響し湯治場古道は消滅した状態にある。
- 国立公園編入の最大のネックは、関係自治体の編入と受入れ合意に加え、利用の一体性に不可欠な避難小屋や歩道等の導線が無いことである。

#### (5) 森吉山は既存面積で国定公園の新規指定が可能である

- 環境省は「環境調査が終わった候補地から随時指定を目指す」としているが、八幡平周辺 4 公園と和賀山塊を含む環境調査は秋田と岩手 2 県の 9 自治体に及ぶため、過去の調査実績(50%)から 2030 年完了は困難と思われる。
- 森吉山県立自然公園(15, 214ha)は北秋田市一市に存在し、単独で国定公園の面積要件(10, 000ha)を満たしている。国定公園指定を早めるには、秋田県が既存の公園面積で環境大臣に所定の「申し出」を行えば 5 年以内の新規指定は可能である。この考えは 1992 年に秋田県自然保護課が地元自然保護団体と旧森吉町・阿仁町に伝えた提案である。
- 例えば、長野県の中央アルプス県立自然公園(35, 116ha)は、環境省の国立・国定公園総点検事業に頼らず、長野県が 2015 年に地元自治体等から国定公園化の要望を受けて準備を開始。2016 年に環境調査を実施。2017 年に公園計画と指定書素案を作成。2018 年に地元 3 自治体で説明会を実施し、2020 年 3 月に既存面積で国定公園の新規指定を果たした。
- 森吉山も既存の面積で新規国定公園化を完了し、環境省の自然環境調査に基づいて拡張区域を加えるという二段階方式で保全地域の拡大を目指すことも一つの手段である。

## (6) 三位一体の改革に伴う自然公園事業と自然環境整備交付金制度

- 国立公園になると、環境省が全て交通インフラや各種環境整備事業を実行しているという思い込みがあるが、国の交付金制度や公園事業の財政措置等は期待通りではない。
- 特に、三位一体の改革(2005年)に伴い国立・国定・都道府県立公園に関する地方と国の役割分担が明確化され、これまで主力だった自然公園等整備費補助金が廃止された。
- 国立・国定公園の自然公園等環境整備事業は、都道府県が自然環境整備計画を策定し、国の自然環境整備交付金を活用し整備する制度になっている。

### ①都道府県立自然公園については

- 国立・国定公園以外における奨励的国庫補助事業の廃止により、都道府県立自然公園等の国庫補助整備事業は全て廃止された。
- 都道府県立自然公園の環境整備事業は、国の自然環境整備交付金の対象にもならない。  
※このことが過去40年来の森吉山国定公園化の大きな理由の一つであった。

### ②国定公園については

- 都道府県に対する国庫補助制度が廃止され、新たに自然環境整備交付金を創設。  
地方は自然環境整備等交付金(事業費の45%が交付金算定)を基に従来の公園事業を行う。

### ③国立公園については

- これまで主力だった都道府県に対する国庫補助事業が廃止された。
- 地方は自然環境整備交付金(事業費の50%が交付金算定)を基に従来の公園事業を行う。
- 国は直轄事業の拡充を図るため、特別保護地区や第一種特別地域の歩道整備を含めた。  
しかし、国の直轄事業であっても特別な保護保全対策を必要とする地区を除く、既存の登山道や施設整備等は地方が行っている。
- 中部山岳国立公園(北アルプス)の所在地である長野県では県・松本市・安曇野市が負担金の範囲で補修材料を山小屋組合に提供しているが、資材運搬用のヘリコプター代や労務費は、一般登山者からの協力金と現地山小屋の負担で整備を行っているのが現状である。
- 環境省もグリーンワーカー事業の一環で歩道整備に一部負担金を出しているが、むしろ都道府県が直轄する国定公園の歩道整備の完成度が遥かに高いと言える。環境省は歩道の整備は積極的ではなく(秋田駒ヶ岳の現状を見れば歴然)、集団施設地区の整備が主体である。

### ④自然環境整備交付金のまとめ

- 自然環境整備交付金は都道府県が策定する自然環境整備計画に対して交付される。
- 計画期間は3~5年、総事業費は2000万円又は4000万円を超えるものが対象となる。
- 市町村が事業主体となる場合は、都道府県を経由して交付となる。
- 整備事業内容や都道府県と市町村の負担割合は各地域の実情を踏まえ独自に設定が可能。
- 秋田県の市町村負担割合は、事業費から交付金額を差引いた額の20%である。  
(例：事業費1億円の市町村負担額は、国立1,000万円・国定1,100万円)

## (7) 国の誘客関係の推進対策は

- 環境省は、国定公園になると国立公園と合わせて国内外にプロモーションを行う。
- 国定公園は57と多いが、単独の森吉山国定公園として紹介されるメリットは大きい。
- 環境省は2021年から「国立・国定公園の自然を活用した滞在型コンテンツ創出事業」の募集を開始。自治体や観光協会、ガイド事業者等からなる協議会が実施する「自然体験促進計画(自然公園法に基づくソフト事業)」の策定に係る経費の補助(補助率2/3~1/2)を始めた。

## (8) 北東北の山岳観光の動向

### ①山旅観光のマインド

- 人気が高まっている山旅観光は、花の名山と日本 100～300 名山の難易度に山小屋のグレードや温泉郷の魅力を加味してフィールドを選択する。その選択肢に公園区分のブランド条件は希薄だ。行ってみたら都道府県立・国定・国立公園であったに過ぎない。
- SNS 全盛時代において、国立ブランドで人は動いていない。いつ・どんなとき・どこへ行けば、どんな遊び・どんな食・どんな出会いが待っているのか。そこに見るべき絶景や異文化に触れる非日常の体験空間があれば、人は地球の極地までも飛ぶ。それが観光である。

### ②北東北の十座十湯をめぐる

- 日本列島は約 300 万年前から始まった海洋プレートの東西圧縮に伴う隆起と火山活動によって山国となった。北海道から九州まで南北約 3000 km に及ぶ海洋性気候が育んだ山懐には箱庭のような溪谷と温泉郷が連なり、約 3 万本の川と山と海の幸が多彩な食文化を醸成した。奇跡の国「絶景列島 ジオ・ジャパン」と称される所以である。その北東北の山群に連なる森吉山もまた、宝石箱を散りばめた千変万化の桃源郷を形作っている。
- そうした魅力的な「北東北の十座十湯めぐり」は、次のようなコースが代表的だろう。新幹線を降りたら栗駒山から北上して早池峰山へ。南部富士岩手山はお鉢巡り、裏岩手の 50 km ロングトレイルと八幡平を闊歩し、秋田駒ヶ岳と乳頭温泉郷から神秘の田沢湖へ。花の百名山森吉山では奥森吉・奥阿仁の懐に湖やクマゲラの森を逍遙し、天国の散歩道と称される溪谷やマタギの里の名瀑群を訪ねる。十和田湖から奥入瀬と蔦沼をめぐり、八甲田山の頂を踏んで津軽富士岩木山をゴールとする。さらに白神山地をまたいで、十二湖から男鹿半島へと日本海を南下する。出羽富士鳥海山を迎れば「北東北の十座十湯をめぐる」熟年男女たちとの山旅は完歩する。これが「みちのく山旅観光」の姿である。そして、若い世代には北東北の魅力を体感できるロングトレイルのワンダーランドとなる。

## (9) 「森吉山」という名称は地域住民のアイデンティティー

- 北秋田市は平成の町村合併で、「4 町の早期の一体感醸成のため」という訳の分からない理由で住所地から大字名(森吉町・合川町・鷹巣町)を捨てた。県北地区の玄関口として北秋田市に開港した空港も「あきた北空港」という愛称名を捨て「大館能代空港」という地理的に合点がいかない曖昧な名称で決着した。
- 令和の世に入り森吉山に十和田八幡平国立公園へ編入か又は国定公園の新規指定という選択肢が国から示された。環境省サイドは八幡平周辺にどんな絵を描くかが課題だと言うが、公園区分の絵面は全く見えてこない。
- 先の北秋田市主催「2023. 6. 24 シンポジウム」で基調講演した環境省は、拡張計画や公園区分の考え方の説明も無く、レンジャー(職員)の募集とユニフォームの紹介だけが際立った。極めつけは、コーディネーターが最後のまとめと称し、プロジェクターで自らのミニ講演を始め、参加者の質問に答える機会を拒否した。今般のフォローアップが「陸と海の 30% 保全」という目標達成のため、地元の協力を得る手段に位置付けてはならない。自然公園の名称消滅は地域にとって将来的に大きく影響する一大テーマであるからだ。
- 地名・名称・総称・固有名詞は、歴史的・文化的・習俗・民俗学的遺産であるのみならず、山岳信仰が山に神格ならぬ人格を与えたように、公園名称の森吉山は地域住民にとってアイデンティティーそのものである。

## (10) 独立峰森吉山の旗印は「森吉山国定公園 ジオ・ジャパン Mt 森吉」である

### ①ぐるっと森吉山をめぐる

- ぐるっと森吉山をめぐる一年を紹介したい。極寒の巨人(樹氷)たちが雪中行軍を終えると山笑うブナ林の眩い春紅葉が峰を走る。新緑のブナ林はエゾハルゼミの蝉時雨。花の百名山は春の妖精たちの乱舞に続き、盛夏はニッコウキスゲなどの猛烈美人たちの舞踏会場に様変わりする。湖・溪流溪谷・瀑布群をめぐるウオータートレックは天国の散歩みちだ。巨木が群立するクマゲラの森を逍遙するトレックは、やがて錦秋の雅からセピアの森へ。四季彩めぐる懐にフォトトレッカーが集う。冬将軍が日本三大樹氷原をつくる頃、山はまた一つ齢を重ねる。この絶景たちが十和田八幡平国立公園であろうはずがない。

### ②ぐるっと森吉山のブランド化

- 森吉山は、どんな季節も・どの瞬間も、妖艶な雰囲気醸し出し、旅人を呼び込む山容が特徴である。「ぐるっと森吉山」の、あまたのビューポイントは、十和田八幡平国立公園の価値ではない。森吉山ブランドを磨き上げるフィールドである。
- 国立公園指定から 89 年の十和田八甲田地域と 69 年になる八幡平地域。この長い歴史を刻んだゾーンの一部に森吉山が編入されては、森吉山のブランド化を進めることは難しい。温泉資源の知名度と圧倒的な宿泊収容能力で優位に立つ、老舗の国立公園ゾーンに埋没してしまうであろう。
- 100 名山に 100 の、200 名山に 200 の競争が生まれるように、利用の増進は一朝一夕に叶うものではない。森吉山オンリーワンの利用増進策を高めるには、秋田空港や他の山岳観光地との結節点になり得る交通インフラの再整備と着地型観光(観光商品や体験プログラムの企画・運営)の拡充に北秋田市の官民がどんな知恵を出し行動するか、その熱量に懸かっている。
- 森吉山の名称を捨て、十和田八幡平国立公園の軒下に甘んずる意味とは何か。名を捨て、実を取る意味はあるのか。見返りに得る果実は今のところ見当たらない。
- 今般の国立編入・国定公園新規指定の選択は「森吉山の名称を守るのか、自ら消し去るのか」、北秋田市民にとって重大な決断である。「北秋田市民と現職の市長・市議、観光関係者は森吉山の名称を消し去った当事者として、決して歴史に記憶されてはならない」。
- 「ぐるっと森吉山」を核に、どんな観光地づくり・どんなマチづくりを目指すのか。十和田八幡平国立公園という老舗の暖簾に頼ることなく、独立峰「森吉山国定公園 ジオ・ジャパン Mt 森吉」の御旗を選択したい。

## (11) 阿仁川とスマイルレール秋田内陸線沿線の里地里山も自然公園に

- 環境省は拡張対象に「人の営みが自然植生域と風景を作り上げた里地里山の二次的自然環境」を加えた。そこで環境省に再提案した拡張地域が、「ぐるっと森吉山」の小又川と阿仁川(大又川)の全集水域と阿仁川と並走する内陸線沿線の里地里山の風土である。
- 「ジオ・ジャパン Mt 森吉」をどんなテーマパークに創り上げるのか、そのツールの一つが森吉山の全集水域(打当川・比立内川・荒瀬川・小様川・小又川)を束ねる阿仁川と並走し、連続する橋梁を走る内陸線スマイルレールである。
- 奥会津の只見線や南阿蘇鉄道が観光鉄道に特化しているように、秋田内陸線も森吉山周遊観光のアクセスになりうるポテンシャルをすでに発揮している。撮り鉄・乗り鉄たちが闊歩する沿線の里地里山に自然公園の価値を付加したスマイルレールの走りを観てみたい。

## (12) 森吉山の単独国立公園指定の方向性

- 森吉山を国立ブランドにするならば、編入ではなく単独の国立公園を目指すべきである。  
しかし、県立自然公園から国立公園新規指定は普通はない。日高山脈も国定から国立に新規指定したように、森吉山も国定公園の順番を踏まなければならない(環境省国立公園課)。
- そこで、同じ大規模カルデラ噴火の阿蘇カルデラと同様の、森吉山も大規模カルデラ地形であろうその姿を紹介し、単独の森吉山国立公園新規指定の方向性を探ってみたい。

### ①阿蘇くじゅう国立公園の阿蘇カルデラの概要

- 阿蘇カルデラは九州のど真中、熊本県・大分県にまたがる阿蘇くじゅう国立公園(指定 1934 年 S9)、面積 72,687ha)に位置する。
- 約 27 万年前に始まり、約 9 万年前最後のカルデラ噴火による陥没地形である。
- カルデラの規模は南北 25 km、東西 18 km、周囲 128 km、面積 380 km<sup>2</sup>に及ぶ。
- 標高 1000m 前後のカルデラ外輪山(高さ約 400m)が阿蘇五岳を囲む日本最大級のカルデラ地形は、ユネスコの世界ジオパークに登録されている。
- カルデラ内の平野部に 5 万人余りが暮らす里地里山の風景は「日本の里百選」にも指定。

### ②阿蘇カルデラ外縁部の国立公園大規模拡張の背景

- 阿蘇の草原(カルデラ外輪山外延部)も含めて、国立公園と同等の資質を有する広大な二次草原が周辺まで一体的に広がっていることが評価され、八幡平周辺同様に大規模拡張地域に選定された。
- 近年、阿蘇地域周辺の草地で太陽光発電のメガソーラー開発が相次いでいるとし、九州の経済界、自治体、メディアでつくる「阿蘇世界文化遺産登録推進九州会議」と環境省、熊本県、阿蘇地域の市町村でつくる「阿蘇くじゅう国立公園協議会」は、規制強化の動きを活発化。環境省は公園計画の一部を見直し、草原の維持や景観の保全を目的に普通地域から特別地域への格上げを主眼とする、公園区域の大規模拡張方針を明らかにした。

### ③森吉山のカルデラの概要

- 森吉山は、約 1000 万年前以降に北海道西部から奥羽山脈 500 km の脊稜を形成した 110 カ所のカルデラ噴火の一角を形成している。その森吉山が単独の大規模カルデラ火山体だとすれば、その規模はおよそ東西南北約 30 km、周囲 120 km 超のカルデラに標高 300~1000m の外輪山 17 座(注 1)を連ねる姿が想像できる。(NHK/BS 絶景列島 ジオ・ジャパン参考)
- 森吉山本体はカルデラ中心部を埋めるように、十二単衣を纏った主峰向岳(1454m)が山頂部に東西約 3 km のカルデラ(注 2)を重ねて鎮座する。
- そのカルデラ東部の奥森吉~奥阿仁地域は、約 200 万年前と 100 万年前に噴出した火砕流が溶結凝灰岩となり平坦な火砕流大地を形成した。その範囲は森吉山県立自然公園(15,214ha)の 3 分の 2 余りを占めていると思われる。
- 火砕流大地は長年の浸食により、奥森吉は小又峡・桃洞溪谷・赤水溪谷・粒様溪谷・様ノ沢溪谷・六郎沢などが、奥阿仁は中ノ又溪谷・立又溪谷などが U 字溪谷を形成し、数多の甌穴群や名瀑群が誕生した。この地形も「世界ジオパーク」の登録に値するであろう。
- 森吉山の全集水域である奥森吉の小又川と奥阿仁の大又川は阿仁前田で合流し、かつては大きな湖の時代もあったであろうカルデラの一角を押し流し阿仁川になったと想像する。
- カルデラ平野部の人口は阿仁地区 2,185 人・阿仁前田地区 1,419 人が暮らす。小又川と大又川の流れが平野部に造り上げた里地里山は、何処を切り取っても日本の原風景である。

- 天然の温泉資源に大きな差はあるが、森吉山とその集水域は阿蘇カルデラ 38,000ha、八幡平地域公園面積 40,491ha を超え 50,000ha に及ぶであろう。

#### ④森吉山国立公園新規指定の課題

- 十和田八幡平国立公園に一旦編入されると、関係自治体の分割論議に巻き込まれ、森吉山国立公園に分割される可能性は極めて難しくなる。まずは今般の見直しで国定公園に新規指定を果たす。そして 2030 年以降も継続するであろう国立・国定公園の見直しにおいて、国立公園の新規指定を目指すことである。

- その課題は、公園面積を現在の 2 倍(30,000ha)以上にするため、利用の増進地域も見据えた拡張地域の実現である。

- ・第 1 は、戦後復興から高度成長期に隆盛を誇った天然秋田スギの伐採跡地で、自然再生を遂げている太平湖の全集水域。森林管理署が成長率 50%以下のスギ植林地を伐採対象地から除外し、針葉樹・広葉樹の「混交林の森」として施業管理を実施している、この 2 つの地域(国有林)である。
- ・第 2 は、森吉山西麓に広がるレクリエーションの森(国有林)である森吉山スキー場全エリアと、約 1,000ha を上回るであろうブナ林(社有林)である。
- ・第 3 は、小又川の里地里山から続く森吉山ダム四季美湖と、その上流域を親水ゾーンとして拡張できるか。(国有地、県有地、私有地)
- ・第 4 は、マタギの里～阿仁前田に至る約 30 km の大又川流域と、その里地里山と並走する内陸線スマイルレール沿線の拡張(奥会津の只見線と南阿蘇鉄道がモデル)。特に比立内地区から遊遊ガーデンに至る段丘河川は、小安峡や抱返り溪谷を凌駕する溪谷美を誇る。
- ・第 5 の課題は、第 1～4 の課題すべての拡張地域を内包する、森吉山全集水域の大又川・小又川を東西南北約 30 km の山群 17 座が囲む約 5 万 ha (500 km<sup>2</sup>) に及ぶであろう旧阿仁町と阿仁前田地区全域の公園指定である。

そのモデルは、平野部の三つの市町村に 5 万人余りが暮らす市街地と集落の里地里山全域が国立公園(普通地域)である阿蘇カルデラである。だとすれば、森吉山麓は何処を切り取っても国立公園の景観要件に叶う資質を持っていると言える。

- その最大の課題は、専門家の科学的な根拠をバックボーンに、景観要件(偉大さ・雄大さ・原生性・希少性・特殊性・固有性及び地学的現象の劇的性のいずれか又は複数の観点から、同一の風景式形中、我が国の風景を代表するとともに、傑出した自然の風景を有する地域)を満たす、説得性がある資質条件とストーリーを如何に作り上げるかに掛かっている。

#### ⑤森吉山国立公園の新規指定は地域の熱意

- 環境省はすでに「森吉山は国立公園の拡張地域と国定公園の新規指定に値するポテンシャルを持っている」、「自然公園と同等の資質を持つ里地里山を拡張地域に選定していく」としている。

- 十和田八幡平国立公園の一角に甘んずることなく、ぐるっと森吉山の山塊を囲む全集水域の国立公園化に向けて、地域の熱意を示す官民挙げての行動を求めたい。

(注 1) 森吉山集水域の外輪山：大又川(阿仁川本流)に沿って国見峠～姫ヶ岳～根烈岳～八羽岳～三枚平山～白子森～大仏岳～大覚野峠～高崎森～ブナ森を分水嶺に小又川を赤水峠～柴倉岳～砂子沢峠～小繋森～源五郎岳～昼様山～七角山に戻る 17 座。

(注 2) 森吉山頂カルデラ：一ノ腰、前嶽、石森、向岳、ヒバクラ岳、カンバ森

## <参考資料>

### (1) 2022. 6. 18 御嶽山シンポジウムにおける環境省の提言

- ・環境省は木曾山脈の御岳県立自然公園(長野県)・御嶽山県立自然公園(岐阜県)を、国定公園の新規指定候補地とした
- ・御嶽山シンポジウムは、環境省のフォローアップ結果発表の4日後に異例の速さで開催。
- ・長野県と岐阜県に跨る御嶽山(3,067m)は23,322haで、国立公園の面積要件(30,000ha)に満たないが、地元では以前から「3,000mを超える独立峰で国立公園に指定されていない山は御嶽山だけである」という国立公園昇格論が持ち上がっていた。
- ・また、2014年に起きた御嶽山の水蒸気爆発による死者・行方不明者は63人に上り、「戦後最悪の火山災害」となった。御嶽山では山麓の復旧整備やシェルターなどの安全対策に迫られ、自治体関係者は県立公園から国定公園の新規指定をその好機と捉えていた。

◎主催：木曾町、玉滝村、公益財団法人日本自然協会

◎後援：長野県、岐阜県、高山市、下呂市

◎テーマ：御岳山の価値と未来(国立・国定公園に向けて)

◎基調講演：「日本の山岳信仰と御岳の宗教文化」皇學館大學教授：中山 郁

◎話題提供：「国立・国定公園の今後の役割と発展」環境省国立公園課長：熊倉基之

「木曾町開田高原における保全活動の取組」木曾町環境協議会長：稲垣 康

「御岳山の価値と自然保護の課題」飛騨高山歩こう会会長：小野木三郎

#### ①環境省自然環境局国立公園課長 熊倉基之氏のコメント

- パネルディスカッションで環境省自然環境局国立公園課長の熊倉基之氏は、地元の国立公園昇格論(単独又は中部山岳国立公園に編入)について答えた。
- ・今回のフォローアップで国立公園に新規指定(昇格)は日高山脈だけである。日高山脈が国立公園とした理由は既に国定であり、今回は一段引き上げる形で国立とした。
- ・奄美大島国立公園も国定から5年後の2017年に国立に指定した。
- ・都道府県立公園から一気に国立公園になることは、普通はない。
- ・御岳山を中部山岳国立公園(北アルプス)に編入したいという考えのようだが、今回は御嶽山の特質(3,000m級の独立峰、山岳信仰の歴史的優勢)にスポットを当てたものである。
- ・欧米の観光客は「スピリチュアルツーリズム」に感心がある。「御岳山も世界文化遺産の熊野古道のような特色を生かした山岳観光を目指してはどうか」と結んだ。

### (2) 十和田八幡平国立公園の分割論

#### ①乳頭温泉郷組合等の十和田八幡平国立公園分割議論

- 環境省は「乳頭温泉郷地区に十和田八幡平国立公園分割論があることは聞いている」が、今般のフォローアップには分割計画はない、とのことである。
- 北東北三県(青森・秋田・岩手)にまたがる十和田八幡平国立公園の十和田湖八甲田地域と八幡平地域は時代が求める利用増進を掲げ、共に地域経済の波及効果を求め十和田湖と乳頭温泉郷間の直通バス運行など公益的連携を深めてきたが、客層は十和田湖への一方通行になり、早々に相互連携は中止となった経緯もあったという。
- 集団施設地区に位置する乳頭温泉郷(乳頭山麓に点在する七つの宿・七つの湯)の関係者は、10年前から十和田八幡平国立公園の八幡平地域の分割議論を行ってきた。「一度は行ってみたい日本の温泉郷ベスト20」にランキングされる乳頭温泉郷のブランド化を進めている。

- 今は公園所在地の市町村や観光協会等の反応や温度差を探っている段階であり、いずれはシンポジウム等を開催し、具体的な分割議論を深めていきたいとのことだ。
- ②乳頭温泉郷の案内板の変化**
- 乳頭温泉郷の環境省所管のキャンプ場の案内板には「十和田八幡平国立公園 休暇村乳頭温泉郷 乳頭キャンプ場」と表記されている。しかし周辺の道路標識や休暇村等の宿泊施設には、十和田八幡平国立公園の表記は見えず「ここは乳頭温泉郷」「休暇村乳頭温泉郷 (National Park Resort)」に表記が張り替えられている。旅行者の視点から見ても違和感がない納得のいく表記であるように思える。国立公園のブランドが薄れた感が大きい。
- ③十和田八幡平国立公園の分割論は東北3県自治体関係者の同意が必要**
- この分割論議は環境省と3県(7市2町)の観光事業者、市民団体、山岳関係者等を交えた別ステージで大いなる議論を交わす時代を迎えている。
  - 大規模拡張地域に選定された森吉山を含む4公園の国立公園編入と分割構想は、まずは拡張地域を定めた上で、十和田八幡平国立公園の「分割と未来を語る熱量」を見定めてからでも決して遅くはない。2030年以降も環境省のフォローアップは、まだまだ続くからだ。
- (3) 国立公園の分割事例**
- 景観の保護と利用増進を目的にしてきた国立公園には、日光と尾瀬のように違うタイプが一緒だったり、東西に分離している上信越高原だったり、富士箱根伊豆のように場所が分かりにくい所が多い。環境省は2000年代に入り国立・国定公園の見直しを進めてきた。
- ①日光国立公園から尾瀬が独立**
- 尾瀬が日光国立公園内にあることを知らない人は多い。1997年頃から入山者が60万人から半減した地元は「日光・尾瀬国立公園」にしてほしいと要望していた。
  - 尾瀬地域は、日本を代表する山地湿原やそれを取り囲む、燧ヶ岳や至仏山などの2000m級の山並みがあり、優れた景観と自然性に恵まれている。一方の日光地区は東照宮などの文化財目当ての観光客が多く観光色が強い。隣接はしているが植生や地形が別物である。
  - 環境省は1997年に「名前だけではなく独立を考えたらどうか」と地元を持ち掛けた。一般観光よりも自然志向のニーズを背景に、国立・国定公園の見直しを進めている環境省は、尾瀬を国立公園再編のシンボルにしたいという待望論があった。独立を巡っては、群馬、福島、新潟の地元3知事が2006年に単独化を求める要望書を環境省に提出した。2007年に尾瀬は独立し尾瀬国立公園(37,200ha)が誕生した(毎日フォーラム、NACS-J抜粋)
- ②上信越高原国立公園から妙高戸隠連山が独立**
- 上信越高原国立公園は、1949年に志賀高原・谷川・苗場・草津・万座・浅間地域(東部地域)が指定され、その後、1956年に妙高・戸隠地域(西部地域)が編入された。
  - 今般の総点検の結果、西部地域は東部地域とは異なる風景形式を有していることが明らかになった。また、利用面においてもそれぞれの地域が独立性・独自性を有している。
  - 以上により、火山・非火山の多様な山岳が密集し点在する高原、湖沼がこれと相まって一体的な自然景観を作り出し、自然景観及び利用状況の面で特質が異なる西部地域を分離し、2015年に妙高戸隠連山国立公園(39,772ha)が誕生した。
  - 上信越高原の西部地域と東部地域は約25km、十和田湖八甲田地域と八幡平地域は鹿角地区を挟んで約50km離れ、同じく利用面において両地域が独立性・独自性を有していることに鑑みれば、十和田八幡平国立公園の方が分割要件を優に満たしていると言えるであろう。